

青森県知事賞

自慢の手作り米

天間林中学校（七戸町）

三年 蛭澤 太一

「太一、今年も頼むよ。」

毎年五月、祖父母から声がかかります。僕はこの言葉を聞くと、よし、今年もがんばるぞと力が入ります。

僕の家では、毎年五月に田植えをしています。家族四人と祖母の六人だけでお米を作っています。今年も、運動会の次の週に田植えをしました。僕の仕事は、我が家の大事な田植え機「さなえちゃん」に苗を積み、祖父の運転する横で苗が真っすぐ植えられているかを確認したり、自動で植えられていく苗を調整したりすることです。また、苗が入っていたバットを洗うのも大事な仕事の一つです。でも、一番大変なのは、田植え機で植えても、歯抜けがあったり、一つの束の本数がまばらになっているので、それを一つ一つ田んぼの中に入り、手作業で植え直したり、数を合わせてたりすることです。この作業の大変なところは、田んぼの中を移動することです。田んぼの中に入ると長ぐつが泥にはまってしまう、足が抜けなくなったり、長ぐつがぬげて足だけ抜けてしまったりするので、なかなか前に進むことができません。でも、それも家族で楽しめる行事の一つです。今年で十一回目の田植えも家族で楽しむことができました。田植えの後は、祖父母が必ず、「助かったあ。ありがとう。」

と、言ってくれます。僕は役に立ててよかったなあと思いつつながら、祖母の作ってくれた弁当をみんな食べてました。仕事した後のお弁当はともおいしく、その中に入っているおいなりのご飯も自分達の米を使っているのだから、さらにおいしく感じます。

今年の田植えは僕にとって、十一回目の田植えでしたが、父母によると、僕が生まれ、一歳になる時から祖父母が「太一」にいい米を食べさせたい」という思いから、長く休んでいた米作りを再開したそうです。その時最初にできた米を「太一米」と呼んで、喜んで食べたり、母方の祖父母にも届けていたりしていたそうです。その話を聞いて、嬉しい気持ちになり、ただのお手伝いではなく、自分で作っている米という意識が高くなりました。僕が毎日食べている米は百パーセント家族で作っているお米ということなので、一粒一粒が大切な物の一つとなりました。

十月になると、稲刈りもします。稲刈りでは、コンバインという稲刈りの機械に乗り、刈った米を袋に入れる作業をしています。そして、その袋に入れた米を乾燥機に運ぶために、トラクターに積む仕事もしています。これは一つ三十キロ以上あるので、父や祖父と一緒にしています。食べる時は、まず米を白米にするため、精米所で米をすりませます。そうしたら、米を研ぎます。部活動がないときには、米とぎをすることも僕の大切な仕事の一つです。一粒一粒大事に流さないように、米研ぎをしています。特に、新米の時にはそれを強く感じ、気持ちを入れて米研ぎをしています。炊き上がったご飯は、キラキラ光って見え、とてもおいしくて、米を作っていてよかったなあと感じます。

妹が生まれた時から、「太一米」は、「太一・乙姫米」となりました。これからも、「太一・乙姫米」を家族で作って続け、大切に食べていきたいと思っています。「太一・乙姫米」は僕の自慢のお米です。